

がん患者の子どもへのサポートプログラム日本版の開発

研究分担者 小林 真理子 放送大学大学院 准教授

研究要旨

がん患者の子どもを対象に CLIMB®プログラムを用いたサポートグループを継続開催し、グループ介入前後に親・子双方にアンケート調査を実施した。4 グループの分析結果より、子どもはグループ参加後に、親の病気を〈自分のせいだと思う〉ことが減じる一方〈経験して強くなったと思う〉ことが増し、がん患者である母親については QOL が向上し、家族面で〈病気についての話し合いに満足〉し、〈配偶者を親密に感じる〉割合が有意に増加していた。介入後に行ったプログラム評価では、すべての項目で高い評価を得た。グループ参加をきっかけに、子どもが気持ちを表現するようになり、不安や孤独感が軽減したこと、親の病気に関する親子間のコミュニケーションが促進されたことが分かった。

2012 年 7 月には、CLIMB®プログラムの多施設での開催を目指し、ファシリテーター養成講座を開催した。全国から 37 名の医療関係者が参加し、開発者よりプログラムの理論やグループ運営の手法を 2 日間かけて学び、その満足度は非常に高かった。その結果、年度内に新たに 3 つの機関でのグループ開催が実現した。来年度はさらに増える見通しであり、多施設共同での有用性の検討を行う予定である。

研究協力者

- 大沢かおり（東京共済病院がん相談支援センター
医療ソーシャルワーカー）
井上 絵末（済生会横浜市東部病院チャイルド
ライフスペシャリスト）
村瀬有紀子（東京医科歯科大学附属病院小児科
チャイルドライフスペシャリスト）
三浦絵莉子（聖路加国際病院こども医療支援室
チャイルドライフスペシャリスト）

A. 研究目的

がん患者の子どもは、通常、親ががんに罹患しているという状況にあるほかの子どもたちと会う機会ほとんどなく、親ががんであることの不安や緊張、自責の念を一人で抱えていることが多い。学童期は、学校という家庭外の世界で仲間との活動や対人関係が増してくる時期であり、境遇を共にする仲間との交流は、孤立感を和らげ自尊感情を高めるために役立つと思われる。一方、がん治療中の親も、子どもへの影響や子どもの日常生活の維持に最も心を砕いているが、その苦悩を分か

ち合えるような子育て中の患者同士の交流の機会は少ないのが実情である。

そこで筆者らは、2010 年より、がん患者の親をもつ学童期の子どもを対象に米国で開発された CLIMB®プログラム^{*}を導入し、サポートグループを継続実施してきた。グループ参加前後に子どもと親を対象にしたアンケートを実施し、プログラムの有用性についての探索的検討を行うとともに、より国内の状況に適応した CLIMB®プログラム日本語版テキストを完成した。（^{*}本プログラムは、ファシリテーター養成研修を受け、理論的知識と実践スキルを修得した者が開催できる。）

本研究では、昨年度の結果をふまえて、以下の 2 点を目的とした調査と活動を行う。

- 1) がん患者の子どもへの CLIMB®プログラム日本版を用いたグループを実施し、アンケート調査によりその有用性を検討する。
- 2) CLIMB®プログラムファシリテーター養成講座を開催し、多施設でのグループ実施に向けての検討点の抽出とバックアップを行う。

B. 研究方法

1) グループ参加者へのアンケート調査

がん患者の子どもを対象としたサポートグループを2010年～2012年の3年間に通算6グループ実施した(1グループにつき毎週6回、各2時間)。子どもにはCLIMB®プログラム(親の病気に関連するストレスに対処する能力を高めることをめざすプログラム)を用いたグループを行い、並行して親グループ(自由な話し合い)を開催した。グループ実施前後に、親子双方に質問紙調査への回答を求め、介入前後の結果の分析を行う。調査内容は図1のとおり。

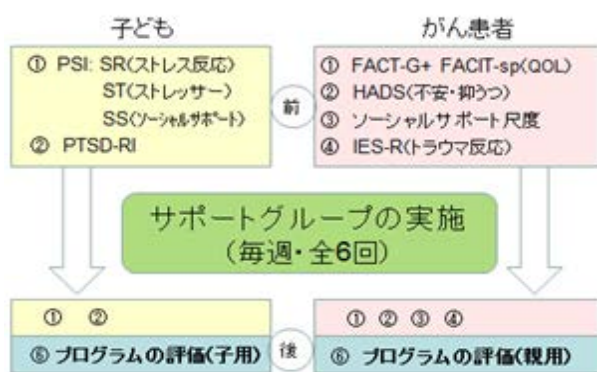


図1 アンケート調査内容

2) ファシリテーター養成講座の開催

CLIMB®プログラムを用いた多施設でのグループ開催を目指し、開発者を講師にファシリテーター養成講座を開催する。参加者にアンケートを実施し、講座についての評価およびに向けての検討点を調査する。

<倫理的への配慮>

研究協力者に対し、研究内容の説明、結果については個人情報保護を行い、研究目的以外には利用しないこと、また個人を特定できるような情報は一切公表しないことを文書および口頭により説明した。文書にて同意を確認した後、グループの実施およびアンケート調査への回答を依頼した。また調査研究実施に際しては、国際医療福祉大学の研究倫理審査委員会の承認を得て開始した。

C. 研究結果

1) CLIMB®プログラム日本版の有用性の検討

今回は4グループまでの参加者を対象として分析を行った。子どもグループへの参加者は24名(男児7名、女児17名、4～14歳、平均8.9歳)、

うち1名は幼児、2名は中学生であった。親グループには、母親18名(38～49歳、平均42.0歳)、父親(配偶者)2名が参加した。親のがん種は乳がん14名、胃がん2名、大腸がん・皮膚がん各1名であり、初発後治療中(経過観察含む)が12名、再発治療中が6名であった。そのうち質問紙調査の分析対象者は、介入前後のデータが揃っている小学生21名と、母親17名とした。

Wilcoxonの符号付順位検定により、グループ介入前後の比較を行ったところ、子どものストレス反応については、介入前後の有意な変化は見られなかったが、親の病気にまつわるPTSSに関して〈自分のせいだと思う〉(p=0.013)および〈ゲーム等に夢中になってほかのことに全く気がつかない〉(p=0.002)が減じ、〈経験して強くなったと思う〉(p=0.019)ことが有意に増していた。

がん患者である母親のQOLについては、FACT-G合計得点(p=0.011)およびスピリチュアリティも含めたFACIT-sp総合得点(p=0.009)において、明らかな改善が見られた。また社会/家族面の〈病気について家族の話し合いに満足している〉(p=0.008)、〈パートナーを親密に感じる〉(p=0.047)の得点が有意に高く変化していた。

プログラム評価では、親・子合わせた30項目中29項目において平均4.38～4.95点(5件法)と高い評価を得た(遠方からの参加者もあり、「会場は便利だった」の1項目のみ4.0点であった)。満足度評価の一部を図2に示す。

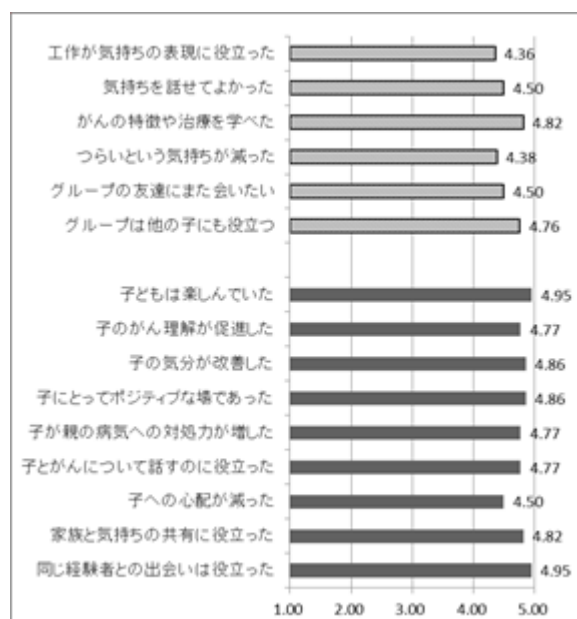


図2 プログラム評価(上段:子ども、下段:母親)

また自由記述欄より、子どもがグループ活動の中で、がんについて学び、気持ちを表現し、つらい気持ちへの対処ができるようになったことが多く報告された。

2) ファシリテーター養成講座開催と検討点

2012年7月15～16日に東京・こどもの城にて、ファシリテーター養成講座を開催した。CLIMB®プログラムの開発者である Dr. Sue Heiney を講師として、講義および実習を行った。また昨年度完成した日本版のテキストを配布し、筆者らが実施しているグループ実践と介入効果の報告を行い、参加者との意見交換を行った。参加者は37名(男性4名)であった。参加希望者は全国から50名と多く、関心の高さがうかがえた。講座終了後に行ったアンケート結果(37名分)を示す。

<参加者の属性>職種は、看護師15名、臨床心理士10名、医師、CLS各5名、MSW、教員各1名、30代が17名(46%)と最も多く、次いで40代11名(30%)、50代、20代各4名であった。

<講座内容について>

以下の4つの内容について、a.とてもよかった、b.まあまあよかった、c.あまりよくなかった、d.全くよくなかった、の4件法で尋ねたところ、いずれも、a. と b. 合わせて100%であり、満足度は非常に高いものであった。(カッコ内は、「a. とてもよかった」の%)

① Heiney先生の講義内容・1日午前(91%)

② 実習・1日午後+2日午前(89%)

③ 日本での実践の報告・2日午後(89%)

④ 全体を通しての質疑応答(81%)

<プログラム開催の検討点>

CLIMB®プログラムの実施可能性については、「今年度実施」5名、「今年度か来年度」・「来年度」各3名、「検討中」24名、「難しい」2名であった。

質疑応答および自由記載より挙げられた検討点およびそれらへの対応は以下のようであった。

- ・開催費用の調達について
- ・開始までの準備の流れについて
- ・必要な物品の準備について(→リストを提供)
- ・各種必要書類の準備(→データで提供)
- ・親が子にグループ参加を進める際の方法
- ・グループ時の子どもの反応の評価法
- ・開催前の見学の要望(→受け入れている)

- ・開催時にスタッフのヘルプを要望
- ・講座修了者のメーリングリスト(→開設へ)
- ・継続的なフォローアップ体制(→ML活用で)
- ・プログラム実施後の合同振り返りの機会を要望

D. 考察

1) CLIMB®プログラムの有用性について

グループ実施前後に行った、ストレス反応、QOL、トラウマ症状に関する質問紙の結果より、グループ介入後に、全体的に改善方向にあることが分かった。中でも、母親のQOLの改善と親子・家族のコミュニケーションの促進がとくに認められた。グループを通してのサポートは短期的なものであり、その後は自身や家族で病気に向き合っていかなければならない。そのため家族間のコミュニケーションを促進し、家族機能を高めることは、グループ介入の重要な目標であり、それが高められたことは、グループ介入の最も大きな効果と考えられる。

プログラム評価においても、参加者の満足度は親子ともに非常に高かった。子どもはグループ活動の中で、がんについて学び、気持ちを表現し、お互いに共有することを通して、がんについて話すことへの抵抗が減じ、つらい気持ちへの対処ができるようになったと考えられた。親にとっても、同年代の子どもを持つがん患者である親同士の交流を通して連帯感を得たことが示唆された。

2) 多施設開催に向けて

ファシリテーター養成講座参加者の満足度および本プログラムに対する関心は非常に高く、がん患者の子どもへの支援において、このようなプログラム手法が求められていることがうかがえた。参加者の意見や要望をふまえて開催に際しての問題点を検討し、メーリングリストの開設、種々の必要書類のデータ配布や情報共有など、CLIMB®プログラムの多施設開催に向けての準備を進めることができた。その結果、2012年度内に筆者らの継続グループのほかにも、3つの施設で本プログラムを用いたグループの開催が実現した。今後はさらなる多施設でのプログラム開催に向けてバックアップ体制を整えながら、多施設研究として調査を続け、本プログラムの有用性についての検討を行う予定である。

E. 結論

グループ参加前後に実施した質問紙調査とプログラム評価より、親子それぞれの状態の改善のみならず、グループ参加がきっかけとなって、親子・家族のコミュニケーションが円滑になったこと、子ども同士、親同士のつながりができたことが示唆され、グループ介入の大きな効果と考えられた。子育て世代の患者の子どもへの支援の一つとして、より多くの子どもたちがサポートグループに参加できる体制を整えていくことが必要である。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. 小林真理子：子育て中のがん患者と子どもへの支援に関する研究—子どもサポートグループの効果に関する検討—、明治安田こころの健康財団助成発表論文集、2012
2. 小林真理子：がん患者の子どもへのアプローチ、がんとエイズの心理臨床、誠信書房（印刷中）
3. 小林真理子：親のがんを子どもにどう伝え、どう支えるか、がん看護、南江堂、18巻1号、57-61、2013年1月

2. 学会発表

1. Kaori Osawa, Emi Inoue, Mariko Kobayashi, Miwa Ozawa, Yasushi Ishida：Actual Condition Survey of Cancer Patients Concerning Explaining Cancer Diagnosis to Their Children and Children's Reaction in Japan, 28th Annual AOSW Conference, May 30 - June 1, 2012, Boston
2. 小林真理子、神前裕子、久野美智子：がんの親をもつ子どもの学校での支援—学校での支援に関する冊子の作成—、日本心理臨床学会第31回大会、2012.9.15、愛知
3. 久野美智子、小林真理子：がんの親をもつ子どもの学校での支援—子どものいるがん患者へのインタビュー調査から—、日本心理臨床学会第31回大会、2012.9.15、愛知
4. 小林真理子：がんの親をもつ子どもへの支援—学校と連携して子どもを支える—（シンポジウム）がんサバイバーシップとサイコオンコロジー、第25回日本サイコオンコロジー学会総会、

2012.9.22、福岡

5. 小林真理子、大沢かおり、三浦絵莉子、小澤美和：がん患者の子どもへの心理社会的支援—サポートグループの実施と評価—、第50回日本癌治療学会学術集会、2012.10.26、横浜
 6. 大沢かおり：がんの親をもつ子どものサポートに取り組んで（シンポジウム）治療期の患者・家族の輝きを引き出すがん看護、第27回日本がん看護学会、2013.2.16、金沢
- ### 3. その他の発表
1. CLIMB®プログラムファシリテーター養成講座の企画・開催、2013.7.15-16、こどもの城、東京
 2. 小林真理子：親ががんになった子どもたちへのケア、かごしま女性医療フォーラム～あなたと考えるこれからのプレストケア～ 2012.5.26、鹿児島
 3. 小林真理子：子育て中のがん患者と子どもへの支援に関する研究—子どもサポートグループの効果に関する検討—、2011年度明治安田こころの健康財団助成金発表会、2012.7.21、東京
 4. 小林真理子：親ががんになったとき～子どものために学校にできること～、市川市教育委員会 平成24年度養護教諭研修会、2012.8.3、市川
 5. 小林真理子：こどもを持つ壮年期がん患者の看護ケア—がん患者さんの子どもの支援—、筑波大学附属病院がん医療従事者研修、2012.8.28、つくば
 6. 小林真理子：親ががん患者である子どもを支える・学校と連携して子どもを支える（シンポジウム）、がん患者・家族支援、がん情報ネットワーク多地点合同カンファレンス、2012.9.13、東京
 7. 小林真理子：がん患者さんの子どもへのサポートプログラム日本版の開発～CLIMB®プログラムの普及に向けて～、小澤班主催公開シンポジウム、2012.12.22、東京
 8. 小林真理子：がんの親をもつ子どものサポートグループ、四国がんセンター市民公開講座・がん患者の子育て支援、2013.1.12、松山
 9. 小林真理子：子どもをもつ患者への支援（ワ

ークショップ)、看護師・がん相談員のための
乳がん看護研修会、2013.1.19、鹿児島

10. 小林真理子：がんを体験した親とその子ども
に対するサポートプログラム CLIMB®の実
践（講演）、千葉県がんセンター第2回心と体
総合支援センターシンポジウム、2013.1.27、
千葉
11. 大沢かおり：がん治療を受けるお母さんと そ
の子どもをサポート、第19回北総ブレストケ
セミナー、2012.7.19、柏市
12. 大沢かおり：がん患者の子どもをサポートす
る（CLIMBプログラム）、SCORE-G サマー
セミナー、2013.8.25、軽井沢
13. 大沢かおり：親ががんになった子どものサポ
ート、がん体験者ピアサポート研修、
2012.9.29、東京
14. 大沢かおり：CLIMB勉強会、国立がん研究
センター中央病院、2012.10.7
15. 大沢かおり：がんの患者さんとその子どもの
支援について ～診断時から終末期まで～、東
京ビハーラ、築地本願寺、2012.11.3
16. 大沢かおり：がんに関する子どものサポート
プログラム、第25回緩和ケアチーム在宅緩和
ケア連携カンファレンス、国立がん研究セン
ター、2012.11.8
17. 井上絵未：がん患者のこどもへのサポート～
がん診療におけるチャイルド・サポート、済
生会横浜市東部病院、2013.1.28
18. 三浦絵莉子：親ががんの子ども達へのサポー
トを考える、癌研有明病院、2012.12.10
19. 三浦絵莉子：親ががんの子どもへのケア、済
生会横浜市南部病院、2013.2.23

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得：該当なし
2. 実用新案登録：該当なし
3. その他：該当なし